ほ場整備関連遺跡発掘調査報告書 XVI-3

東 出 遺 跡

— 近江八幡市所在 —

1989.3

滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

東出遺跡

ひがし　で

— 近江八幡市所在 —

1989.3

滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県教育教育委員会では、活力のある県民社会、生き甲斐のある生活を築くための一つとして、文化環境づくりに取りくんでいます。特に、文化財保護行政にたずさわるものとして、近年の社会変化に即応し県下の実情や将来あるべき姿を見定めつつ、文化財の保護と活用に努めております。

先人が残してくれた文化財は、現代を生きる我々のみならず子々孫々に至る貴重な宝でもあります。このような大切な文化遺産を破壊することなく、後世に引き継いでいくためには、広く県民の方々の文化財に対する深い御理解と御協力を得なければなりません。

ここに、昭和63年度に実施しました県営ほ場整備事業に係る発掘調査の結果を取りまとめましたので、御高覧のうえ埋蔵文化財の御理解に役立てていただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施に御理解と御協力を頂きました地元の方々、並びに関係機関に対して厚く御礼申し上げます。

平成元年　3月

滋賀県教育委員会
教育長　西池季節

例　　言

1. 本書は昭和63年度県営ほ場整備事業に伴う近江八幡市東出遺跡の発掘調査報告書で、昭和63年度に発掘調査し、整理したものである。
2. 本調査は滋賀県農林部からの依頼により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、（財）滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 発掘調査にあたっては、近江八幡市教育委員会の協力を得た。
4. 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さは東京湾の平均海面を基準としている。
5. 本事業の事務局は次のとおりである。

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	堀出亀与嗣
同　課長補佐	小川　啓雄
埋蔵文化財係長	林　博通
同　主任技師	木戸　雅寿
管理係主任主事	山出　隆

（財）滋賀県文化財保護協会

理事長	吉崎　貞一
事務局長	中島　良一
企画調査課長	近藤　滋
同　調査第一係長	大橋　信弥
同　調査第一係主任技師	宮崎　幹也
同　調査第二係主任技師	濱　修
総務課長	山下　弘

6. 本書の執筆・編集は調査担当の濱修が行なった。
7. 出土遺物や写真・図版については、滋賀県教育委員会で保管している。

目　　次

序
例言
第１章　はじめに …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 1
第３章　調査の経過 …… 5
第４章　検出遺構 …… 5
第５章　出土遺物 …… 12
第６章　まとめ …… 18

挿図目次

第１図　位置図
第２図　東出遺跡と周辺の遺跡
第３図　遺跡位置図
第４図　東出遺跡調査範囲図
第５図　Ｔ－１遺構配置図
第６図　Ｔ－２遺構配置図
第７図　Ｔ－３遺構配置図
第８図　Ｔ－４遺構配置図
第９図　Ｔ－４、SD－１遺物出土状況図
第10図　Ｔ－５遺構配置図
第11図　Ｔ－１出土遺物実測図
第12図　Ｔ－２・Ｔ－３出土遺物実測図
第13図　Ｔ－４出土遺物実測図
第14図　Ｔ－５出土遺物実測図

図　版　目　次

図版一　遺跡　(1). 調査地遠景（東より）
(2). 調査前近景（北より）
図版二　遺跡　(1). 妙感寺古墳（西より）
(2). Ｔ－１表土除去（北より）
図版三　遺構　(1). Ｔ－１検出状況（西より）
(2). Ｔ－１近景（西より）
図版四　遺構　(1). Ｔ－１全景（西より）
(2). Ｔ－１全景（東より）
図版五　遺構　(1). Ｔ－２全景（北より）
(2). Ｔ－２全景（南より）
図版六　遺構　(1). Ｔ－３検出状況（北より）
(2). Ｔ－３土壙（西より）
図版七　遺構　(1). Ｔ－３全景（北より）
(2). Ｔ－３全景（南より）
図版八　遺構　(1). Ｔ－４全景（北より）
(2). Ｔ－４全景（南より）
図版九　遺構　(1). Ｔ－４・ＳＤ－１調査状況（北より）
(2). Ｔ－４・ＳＤ－１近景（東より）
図版十　遺構　(1). Ｔ－４・ＳＤ－１検出状況（南より）
(2). Ｔ－４・ＳＤ－１完掘状況（東より）
図版十一　遺構　(1). Ｔ－４・ＳＤ－１土器出土状況（南より）
(2). Ｔ－４・ＳＤ－１土器出土状況（西より）
図版十二　遺構　(1). Ｔ－４実測状況（北より）
(2). Ｔ－４・ＳＤ－１断面（西より）
図版十三　遺構　(1). Ｔ－５全景（北より）
(2). Ｔ－５全景（南より）
図版十四　遺構　(1). Ｔ－５・ＳＤ－１近景（南より）
(2). Ｔ－５・ＳＤ－１土器出土状況（東より）
図版十五　遺物　(1). Ｔ－４・Ｔ－５出土遺物
図版十六　遺物　(1). Ｔ－１出土遺物
(2). Ｔ－１・Ｔ－２出土遺物
図版十七　遺物　(1). Ｔ－２・Ｔ－３出土遺物
(2). Ｔ－４出土遺物
図版十八　遺物　(1). Ｔ－５出土遺物
(2). Ｔ－５出土遺物

第１章　はじめに

本書は昭和63年度県営ほ場整備事業（桐原・馬淵地区岩倉工区）に伴う、近江八幡市東出遺跡の発掘調査の成果をまとめたものである。東出遺跡は『昭和60年度滋賀県遺跡地図』によれば、飛鳥時代を中心とした遺物の散布地として周知されている。また、隣接する御館前遺跡や観音堂遺跡では、昭和56年度以来のほ場整備事業や、白鳥川改修工事に伴う事前調査で弥生時代から中世にかけての数多くの遺跡が発見されている。

そのため、ほ場整備事業の実施に伴い、遺跡の確認と、遺構保存の調査を実施することとなった。調査の実施に当っては、地元岩倉地区の関係者の方々に協力を得た。

第２章　遺跡の位置と環境

東出遺跡は『昭和60年度滋賀県遺跡地図』によれば、近江八幡市長福寺町に位置するとされるが、行政上は近江八幡市馬淵町岩倉地先に位置する。今回の調査は、県道近江八幡蒲生線と主要地方道近江八幡土山線に挾まれた三角地帯であり、瓶割山・岩倉山の南山麓に位置する。（第２・３図）

この地域は、北に瓶割山（標高234.5ｍ）とそれに連なる岩倉山（227ｍ）があり、南には雪野山（309ｍ）山系の北端が迫る狭隘な地帯である。この峡谷を八日市地域から琵琶湖にむかって流れだす白鳥川・布引川・御沢川などの小河川が集中するため、普段はのどかな小川も梅雨時になると、上流の都市化とも相俟って、たびたび集中豪雨にみまわれる。

瓶割山・岩倉山・雪野山等の孤立山塊は湖東流紋岩類とそれに貫入した花崗斑岩とからなり、近江盆地が陥没した時、山頂部がとり残されたもの[1]とされる。この岩倉

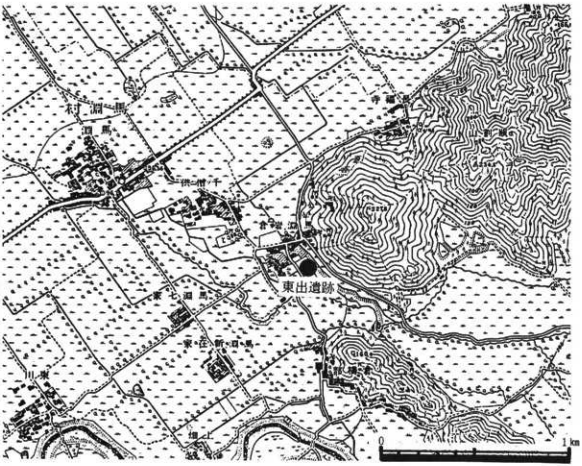
第１図　位　置　図

A　東出遺跡　1. 九里氏館遺跡　2. 金剛寺城跡　3. 金剛寺遺跡　4. 宮ノ後遺跡　5. 大手前遺跡　6. 御所内遺跡
7. 金瀬遺跡　8. 西海道遺跡　9. 谷氏館遺跡　10. 蔵ノ町遺跡　11. 上下遺跡　12. 西中遺跡　13. 寒萩遺跡
14. 柿木原遺跡　15. 半田遺跡　16. 上田遺跡　17. 川ノ口遺跡　18. 柿ノ町遺跡　19. 馬淵城遺跡　20. 堂ノ内遺跡
21. 御館前遺跡・千僧供古墳群　22. 勧学院遺跡　23. 小田中遺跡　24. 長光寺城跡　25. 町田遺跡　26. 岩倉山北古墳群
27. 瓶割山西古墳群　28. 長福寺城跡　29. 妙盛寺古墳　30. 岩倉山南古墳群　31. 上平木古墳群　32. 瓶割山古墳群
33. 上沢遺跡　34. 田中堂遺跡　35. 中出遺跡　36. 倉橋部遺跡　37. 安吉古墳　38. 倉橋部廃寺遺跡　39. 栗木山古墳
40. 倉橋部古墳群　41. 西ノ前遺跡　42. 主馬寺遺跡　43. 浄土寺C古墳群　44. 中羽田西山古墳群　45. 下羽田遺跡

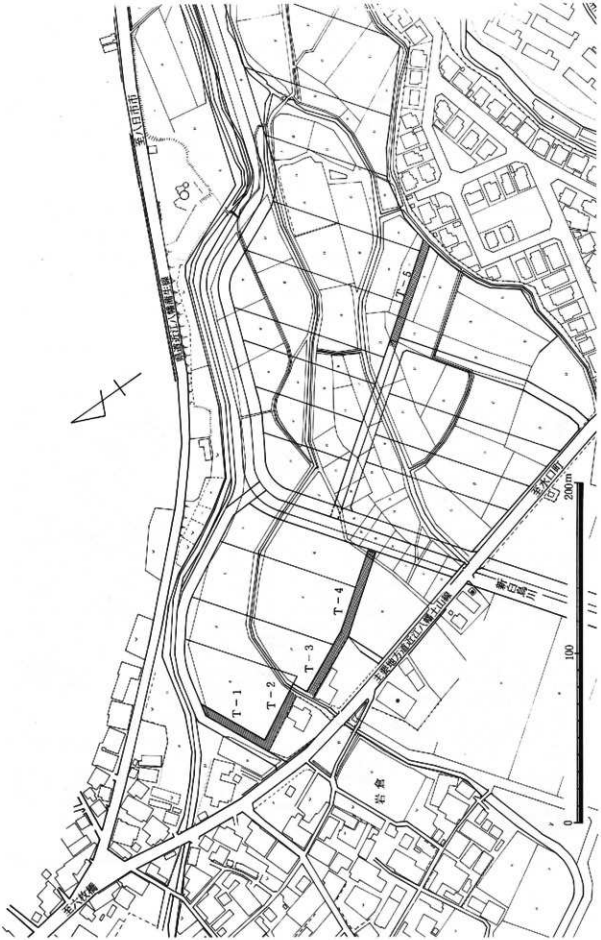
第２図　東出遺跡と周辺の遺跡

山は古来良質の石材を産出し、現在も山中には巨石が数多く見られる。蒲生郡誌によれば、織豊期には岩倉村の石工は八幡城・大坂城・聚楽第の工事に参加したとされる。

周辺の遺跡（第２図）は、旧石器時代では布引山系で有舌尖頭器や翼状石器が出土している。[2] 近江八幡市内では宮ヵ浜湖底で尖頭器が出土しているほか、蔵ノ町遺跡[3]でも尖頭器が出土している。縄文時代の遺跡は、湖岸周辺に集中して、元水茎遺跡や長命寺湖底遺跡などがあるが、内陸部では常衛遺跡[4]で中期の土器棺墓が出土しているほかは、金剛寺遺跡[5]・勧学院遺跡[6]などで後期・晩期の破片が出土しているにすぎない。弥生時代では遺跡数も増加してくる。千僧供町・岩倉町周辺では、後期になると千僧供町勧学院遺跡で方形周溝墓[6]が、堀ノ内遺跡では五角形竪穴住居[7]も検出されている。古墳時代になると、引き続き竪穴住居が構築されるほか、千僧供古墳群として、供養塚古墳・住蓮坊古墳・岩塚古墳・トギス塚古墳などが出現する。後期になると、瓶割山から掘立柱建物群[6]なども検出されている。さらに、長光寺山城・馬淵城跡など中世城館も多い。こうした遺跡群は、この地域が古代より、湖東から湖南にかけての交通の要衝であり、文化の中心地であったことを示している。



第３図　遺跡位置図（明治26年測図）



第4図　東出遺跡調査範囲図

第３章　調査の経過

調査は昭和63年度県営ほ場整備事業（桐原馬淵地区岩倉工区）に伴い、遺跡の範囲確認と遺跡への影響を確認するため、直接工事の影響を受ける小排水路について、４月19日から21日まで試掘調査を実施した。その結果、第 137－２号小排水路、第 137－３号小排水路、第94－１号水排水路で遺構を確認したため、発掘調査を実施し、遺構の記録保存を計ることとなった。

調査は６月１日から６月25日まで発掘調査を実施し、その後整理調査を行なった。

調査区はＴ－１からＴ－５まで設定した。（第４図）Ｔ－１、Ｔ－２、Ｔ－４はすでに耕土や床土が除去され、客土により嵩上された状態であり、Ｔ－３、Ｔ－５は床土が除去されたままの状態であった。調査はＴ－１・Ｔ－５・Ｔ－３・Ｔ－４・Ｔ－２の順に行なった。梅雨の集中豪雨でＴ－５がしばしば冠水し早急に調査する必要があったため、Ｔ－５を予定より先に調査した。調査は重機により表土を除去した後、人力で遺構を検出し、掘込み、写真と図面で記録化を計った。

第４章　検出遺構

Ｔ－１（第５図・図版四）

この調査区では、包含層を除去すると、多くのピットが検出されたが、掘立柱建物と成るものは２棟のみであった。

掘立柱建物（ＳＢ－１）　トレンチ西より検出した掘立柱建物である。東西４間、南北は不明である。南北柱列でＮ－24°－Ｗを示し、柱穴は直径30㎝前後で、深さは検出面より12～18㎝を測る。Ｐ－１より土師器皿片12・13（第11図）が出土している。中世後期のものと思われる。

掘立柱建物（ＳＢ－２）　南北列でＮ－16°－Ｅを示すが、プランは明確ではない。柱穴は30㎝前後を示し、深さは検出面より30㎝前後である。Ｐ－２からは土師器皿14（第11図）が出土している。これも、中世後期の遺構と思われる。

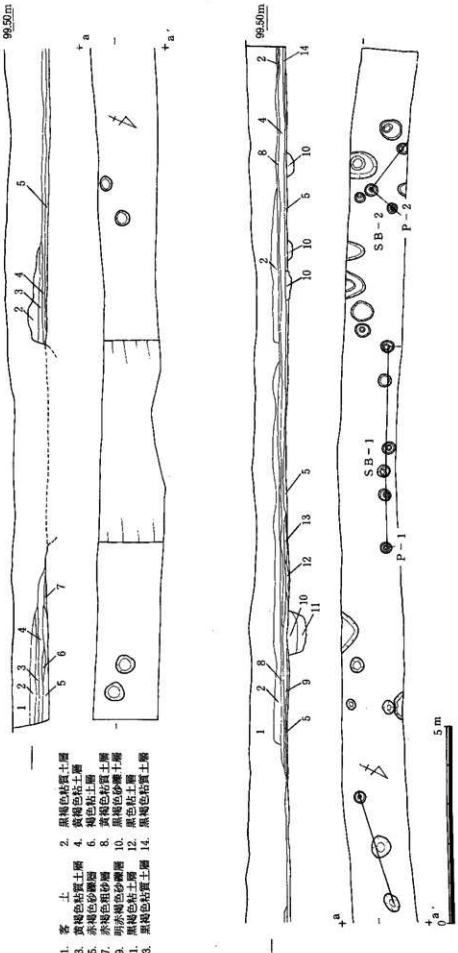
このトレンチでは直径30㎝前後の柱穴と、60～70㎝前後のものが見られる。小形の柱穴からはいずれも土師器皿が見つかったために、中世後期の柱穴と思われるが、大形の物は土師器の細片のみしか検出されなかったが、包含層の出土遺物から奈良時代中ごろの遺構と思われる。

Ｔ－２（第６図・図版五）

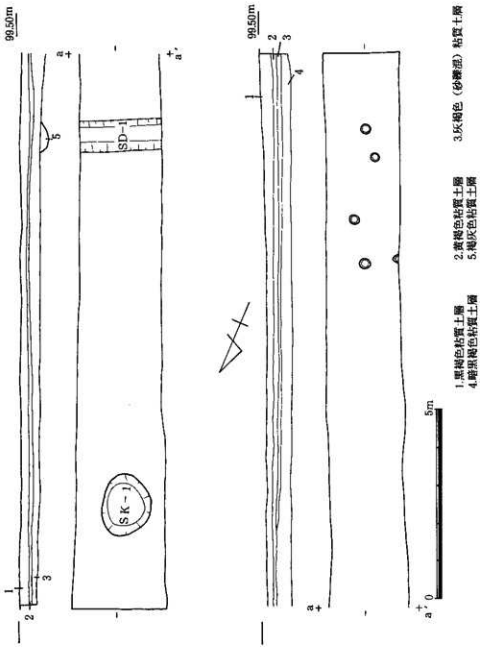
２トレンチからは土壙と溝・柱穴などが検出された。

土壙（ＳＫ－１）　南北の直径が 1.6ｍを測るやや楕円形の土壙で、深さは20㎝程度である。遺物の出度量も少なく性格は不明であるが、中世後期の焙烙片が出土している。

溝（ＳＤ－１）　幅80㎝、深さ20㎝前後で主軸は東に約60°振られる溝である。遺物は含まれていない。埋土には砂礫が多く見られた。


99.50m
a
a'
SB－1
SB－2
P－1
P－2
5m
1. 客　土
2. 黒褐色粘質土層
3. 黄褐色粘質土層
4. 黄褐色粘土層
5. 赤褐色砂礫層
6. 褐色粘土層
7. 赤褐色砂層
8. 黄褐色粘質土層
9. 明赤褐色砂礫層
10. 黒褐色砂礫土層
11. 黒褐色粘土層
12. 黒褐色粘土層
13. 黒褐色粘質土層
14. 黒褐色粘質土層

第5図　T－1遺構配置図



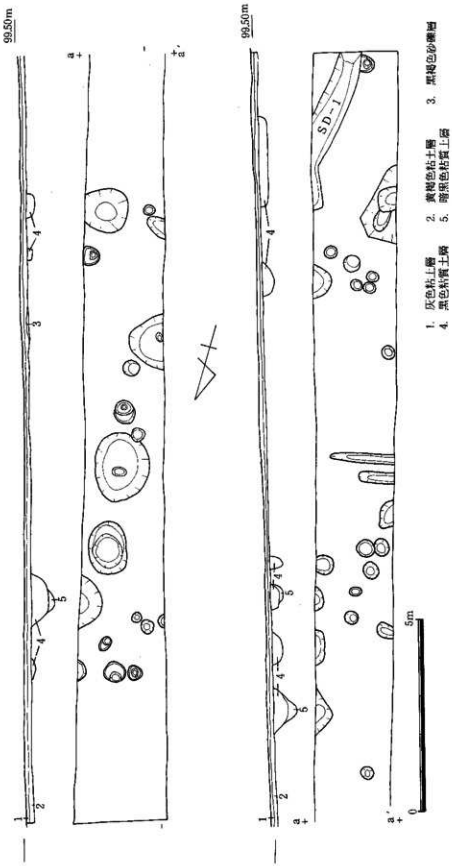
第6図　T－2遺構配置図

T－3（第7図・図版七）

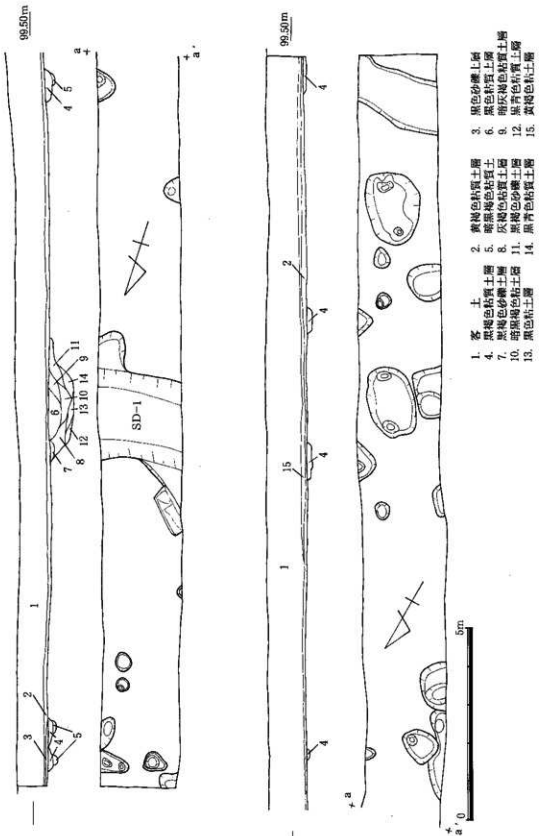
3トレンチでは大型の土壙や、ピット、溝状遺構が検出された。

土壙　大型の土壙が5基検出され、検出面から30～50cmの深さを測り、直径が1.50m前後の円形に近いものである。埋土は黒色粘土で、遺物は含まれていない。断面の形状は放物線状になるが、南北方向に並ぶことから掘立柱建物の柱穴の可能性も考えられる。

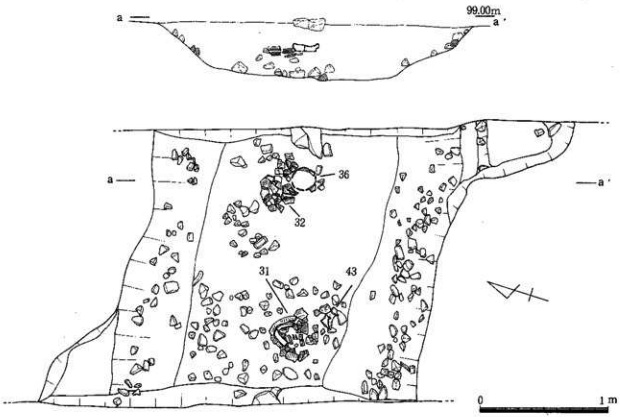
溝（SD－1）　ほぼ南北方向に流れる溝である。幅約70cm、深さは約20cmで埋土は黒色粘質土である。遺物は含まれていない。



第７図　Ｔ－３遺構配置図


99.50m
a
a'
SD-1
1. 客　土
2. 黄褐色粘質土層
3. 黒色砂礫土層
4. 黒褐色粘質土層
5. 暗黒褐色粘質土
6. 黒色粘質土層
7. 黒褐色砂礫土層
8. 灰褐色粘質土層
9. 明灰褐色粘質土層
10. 暗黒褐色粘土層
11. 黒褐色砂礫土層
12. 黒青色粘質土層
13. 黒色粘土層
14. 黒青色粘質土層
15. 黄褐色粘土層
0
5m

第8図　T－4遺構配置図



第9図　T－4、SD－1遺物出土状況図

T－4（第8・9図、図版八～十二）

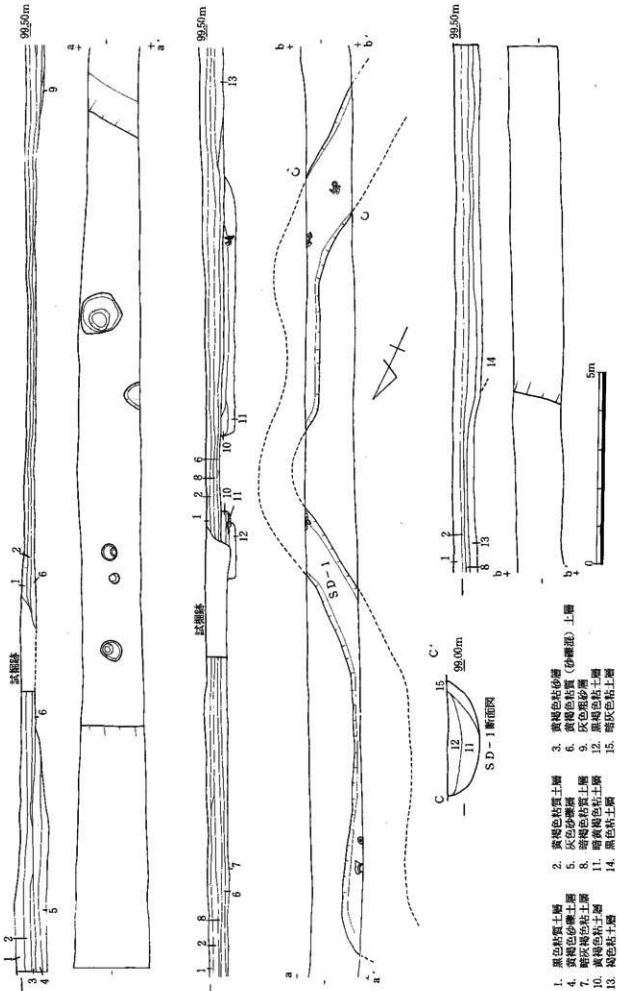
4トレンチからは、溝（SD－1）が検出された。そのほか大小の土壙・ピットが検出されたがその性格は明らかでない。SD－1以外では遺物の出土はなかった。

溝（SD－1）　この溝は幅がトレンチ中央で約 2.5mあり、深さは 1.2mで、ほぼ東西に流れる。客土を除去すると、ほぼ直下に黒褐色の埋土が検出できた。平面形は溝の両端にそれぞれ平担面が見られ、断面は緩やかなカーブを描く。出土した土器の多くは、中層にやや浮いた状態となって出土し、その上層には焼土塊が出土した。溝の基底面と法面には直径5～10cm程度の河原石が葺き石状に散布していた。4トレンチの出土遺物はすべてこの溝から出土した。この遺構は方形周溝墓の周溝の可能性も考えられるが、このトレンチ内では関連する周溝は検出されなかった。灌漑用の水路であろうか。この溝は古墳時代初頭には埋没したものと思われる。

T－5（第10図、図版十三・十四）

溝（SD－1）　この溝は幅 1.0～ 1.7mあり、深さは30～40cmである。トレンチ内に見え隠れするように蛇行して検出され、北西方向に流下する。埋土は褐色粘土で5～10cmの礫も多く見られた。出土した土器から古墳時代初頭の時期に埋没した自然流路と思われる。

また、トレンチ南端は南に落込み、腐植土を含む黒色粘土層が堆積していたが、遺物の出土は見られなかった。



第10図　T－5遺構配置図

第５章　出土遺物

Ｔ－１（第11図、図版十六）

Ｐ－１（12・13）　土師器皿がピット内より出土した。12は口縁部上半で肥厚し外側に伸び口縁端部を丸くおさめる。体部下半で内側に屈曲する。胎土はこまかく、色調は灰白色を呈する。復元口径は10cm、器高は 1.8cmである。13は口縁部上半を肥厚させ、端部を丸くおさめる。体部下半を強くナデて内弯させている。色調は灰白色で、胎土は密で、焼成はやや甘い。12・13共にやや摩滅しているが、15世紀代のものと思われる。

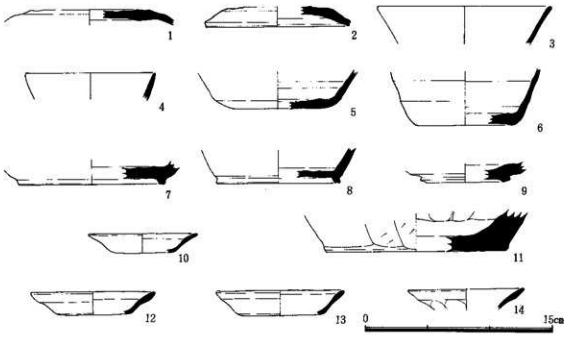
Ｐ－２（14）　ピット内より土師器皿が出土した。口縁部上半をやや肥厚させ、端部は丸くおさめる。色調は灰褐色、胎土は密で、焼成はやや甘い。復元口径は 9.4cmである。15世紀代のものである。

包含層（１～11）　１・２は須恵器の坏蓋、３から９は坏身である。

１はつまみと端部を欠くがやや大型の蓋で、ヘラ削りが著しい。２は１に比べるとやや小型で復元口径は11.8cmである。口縁端部はやや丸みを持つ。３・４は坏身の口縁部で、斜め外方向に伸び口縁端部は丸くおさめる。５・６は高台の付かない坏身である。内面・外面とも回転横ナデを施し、底部外面は未調整である。７から９は断面方形の張付け高台の付く坏身である。７はやや厚い底部を持ち、胎土は１～２mm大の砂粒を含む。８はやや高い高台を持ち、胎土は精緻で色調も明るい青灰色を呈す。９は濃い青灰色を呈し、器壁内には空気穴が目立つ。

10は土師器の皿である。遺構面直上より出土した。口縁部上半を横ナデで肥厚させ、端部は丸くおさめる。

11は常滑系の大甕の底部である。胎土には石英等の砂粒を多く含み、内面は回転ナデ、外面は



第11図　Ｔ－１出土遺物実測図

ヘラ削りが見られる。

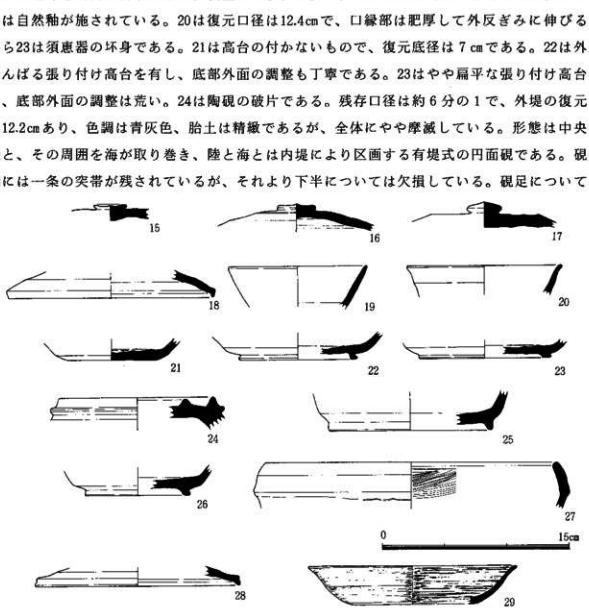
これらの遺物の年代観は、1から9が8世紀代、10から14は15世紀代の遺物と思われる。

T－2（第12図、図版十六・十七）

SK－1（26・27）　26は須恵器の坏身で高台の付くものである。復元口径は 8.2cmで、色調は濃い青灰色、全体に摩滅が見られる。8世紀代のものである。

27は焙烙の口縁部で、復元口径は23.4cmである。口縁部はやや肥厚し、外面には折り返しの段が見られる。内面にハケ目を施す。色調は暗灰褐色で、胎土は精緻である。15世紀代のもの。

包含層（15～25）　15から18は須恵器の坏蓋である。15は扁平なつまみを持つ。16は大型のやや扁平なつまみを有し、天井部には粘土の継ぎ目痕が見られる。17はやや宝珠形となるのつまみを付し、外面ヘラ削り、内面は横ナデが見られる。また、内面には二条のヘラ描き沈線が見られる。18は端部を内側に折り曲げる。胎土には砂粒が多い。19・20は坏身の口縁部である。19は外面には自然釉が施されている。20は復元口径は12.4cmで、口縁部は肥厚して外反ぎみに伸びる。21から23は須恵器の坏身である。21は高台の付かないもので、復元底径は7cmである。22は外方にふんばる張り付け高台を有し、底部外面の調整も丁寧である。23はやや扁平な張り付け高台を有し、底部外面の調整は荒い。24は陶硯の破片である。残存口径は約6分の1で、外堤の復元口径は12.2cmあり、色調は青灰色、胎土は精緻であるが、全体にやや摩滅している。形態は中央部の陸と、その周囲を海が取り巻き、陸と海とは内堤により区画する有堤式の円面硯である。硯部外端には一条の突帯が残されているが、それより下半については欠損している。硯足についても



第12図　T－2（15～25）、T－3（28.29）出土遺物実測図

その形態については不明である。25は須恵器系無釉陶器の坏底部である。高台は断面逆三角形を呈し、内・外面は回転ナデを施す。

これらの年代観は15から24は、8世紀代のものと考えられ、20・22はやや古くなる。24は平城京SD3715出土[9]のものに近い。25は10世紀中ごろのものと思われる。

T－3（第12図・図版十七）

いずれも包含層からの出土である。トレンチ全体でも遺物の出土は少量であった。

28は須恵器の坏蓋で復元口径は16.4cmである。端部は強い横ナデにより折り返される。

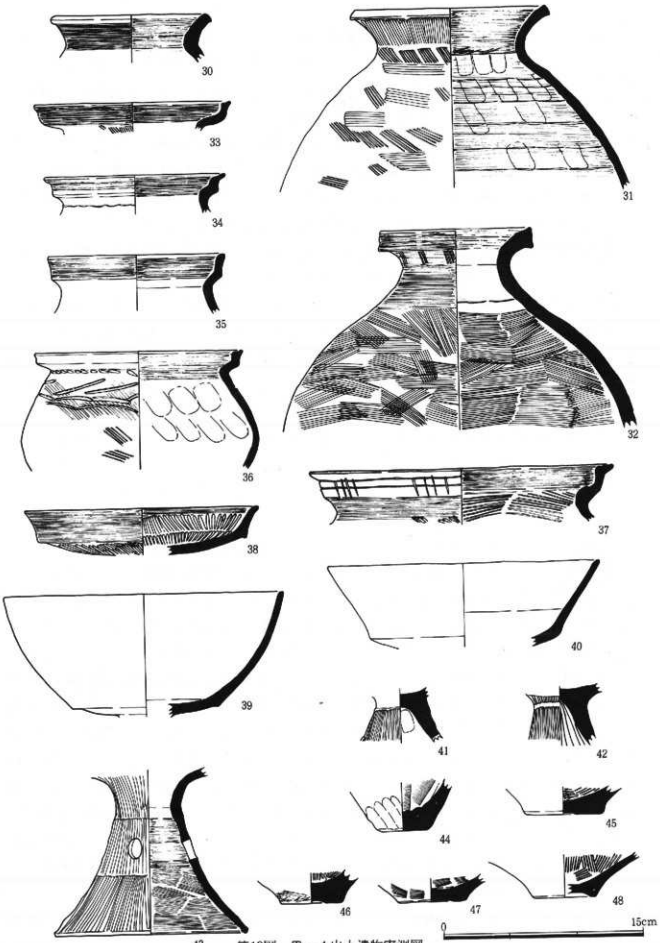
29は土師器の皿である。口縁部はゆるやかに外反し、口縁端部は丸くおさまる。色調は赤橙色、胎土は密であり、焼成はやや甘い。

28は8世紀中ごろ、29は9世紀中ごろのものと思われる。

T－4（第13図、図版十五・十七）

SD－1（30～48）　30は壷の口縁でくの字に外反する。口縁部は丸く、外方にややつまみだされる。器壁は厚く、復元口径は11.0cmである。色調は赤橙色で、胎土は密であるが、調整は非常に甘い。31は外反する口縁部を持つ広口壷である。全体に緩やかなカーブを以て外反し、頸部と体部とのくびれは不明瞭である。口縁体部は外方にややつまみ出される。外面の調整は体部を荒いハケ目のうえからヘラ磨きを縦・横に雑に施して、頸部から口縁部にかけて縦方向にヘラ磨きを施す。内面は頸部に薄くハケ目状の調整が見られ、そのうえを横ナデで仕上げたものである。体部には粘土紐継ぎ目痕が明瞭に残り、その上を指押さえと横ナデで調整する。胎土は1～2mm大の砂粒を多く含む。32は大型の壷の上半である。口頸部は大きく外反し、頸部やや狭く、頸部から体部の区画は明瞭ではない。口縁端部は外側に面を持ち、上端、下端からの横ナデにより凹線状の段を作る。外面はやや荒いハケ目を施し、頸部のハケ目は横ナデでナデ消されている。内面は体部に密なハケ目が施され、口縁部は横ナデが施される。

33から37は受け口状口縁を持つ甕である。33は甕の口縁部で、復元口径は14.8cmである。受け部の頸は丸く、立ち上がりはゆるやかに外方に伸びる。内外面とも横ナデを施し、外面頸部にハケ目を施す。34は外方に伸びる口縁部で、頸部の張りは明瞭である。口縁端部は強い横ナデで更に外方にのび、全体にS字に近い形状を呈する。35は頸部からほぼ上方に伸び、頸部から口縁端部にかけて面を持ち、端部は丸くおさめる。36は受け口状口縁部を持つ鉢である。口頸部は屈曲してさらに上方に立ち上がる。口縁端部は外上方に強い横ナデでつまみ上げられている。体部外面はハケ目が所々見られ、頸部にヘラ状工具による刺突と、体部上端には直線文、崩れた波状文を施す。内面は口縁部を横ナデし、体部は指押さえにより器壁を薄くしている。全体に摩滅している。37は復元口径が22.8cmである。屈曲した頸部から上方に伸びる口縁部と、さらに屈曲して外方に伸びる端部から成る。口縁部外面には二条の平行沈線と、四条からなる縦方向の沈線を施す。頸部には刺突痕が見られる。内面は口縁部に横ナデ、頸部から体部にかけては荒いハケ目を



第13図　T－4出土遺物実測図

施す。

38から42は高坏である。38は坏底部が直線的に外方に伸び、口縁部との境で稜をもつ。口縁部は外反して立ち上がり、端部は横ナデによりやや面をなす。外面は口縁部を横ナデして、坏部はハケ目の上から丁寧なヘラ磨きによりハケ目を消している。内面はヘラ磨きで調整し、口縁部立ち上がり部分は横ナデの上からやや粗くヘラ研磨する。39は深い坏部をもち、坏底部はやや平らに伸びる。外面は平滑に仕上げて、内面はやや粗い。40はややあがり気味の坏底部から、斜め上方に直線的に伸びる口縁部を持ち、端部は丸くおさめる。外面共に摩滅して調整等は明瞭ではない。41は三点透かしの脚部である。外面にヘラ磨きを施し、脚内面は指押さえで調整している。42は坏底部と脚部外面を丁寧にヘラ磨きし、脚部内面には絞り目痕が見られる。

43は器台の脚部である。三方に透かしを持ち、脚部から坏部にかけては緩やかに屈曲している。外面はヘラ磨きを施し、内面下半は横ナデで調整するが、ハケ目が薄く残る。

44から48は壷・甕の底部である。44は平底で、外面を強く指押さえし、やや方形に変形している。内面はヘラ状工具の先端で刺突したあと、細かなハケ目を施す。32の底部と思われる。45はやや上げ底になり、内面にはハケ目を施す。46は中央部が上げ底となり、外面をヘラ状工具で調整し、内面は粗いハケ目を多く施す。31の底部と思われる。47はやや上げ底となり、内外面にハケ目を施す。48は上げ底で、体部にかけて大きく外反し、器壁も薄い。

土器の年代観は、38が弥生時代後期の高坏と思われるが、その他はいずれも古墳時代初頭の時期と考える。

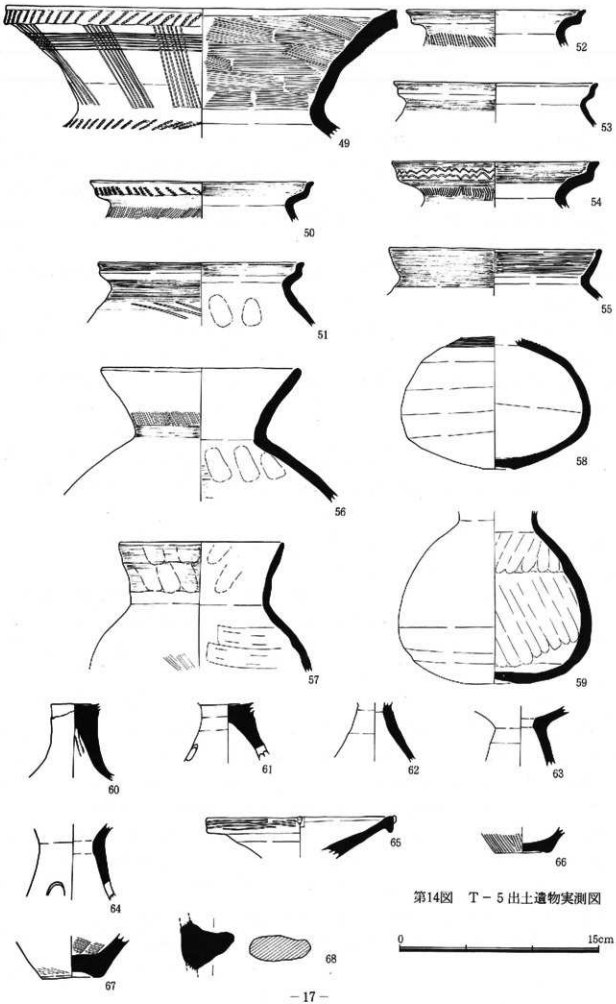
T－5（第14図、図版十五・十八）

いずれもSD－1から出土したものであるが、61・68は上層より出土したものである。

SD－1　49は弥生後期の大甕の口縁部と思われる。厚い器壁で、頸部から口縁部にかけて大きく外反する。口縁端部は上方につまみ上げられる。外面には七条のクシ状工具による、縦方向と、横方向に沈線が施される。口唇部と頸部には刺突列点文が施され、内面は横方向にハケ目が施される。色調は灰褐色で、胎土には1～5㎜大の砂礫を含み、焼成はもろい。

50から54は受け口状口縁部を持つ甕である。50はくの字に外反する口頸部が外方に伸びて、口縁端部はさらに外方につまみ出され、口縁端部は丸くおさまる。外面は口縁頸部に刺突列点文を施し、体部にはハケ目を施す。内面は横ナデ調整する。51は外反する頸部から口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部は外方につまみ上げられ丸くおさまる。体部外面は方向のヘラ描き沈線を施す。52は大きく外反する頸部と、張りだした頸部から外方に伸びる口縁部を持つ。さらに外方向につまみ出される端部は上方に面をなす。体部外面には荒いハケ目を施す。53は薄い器壁で、頸部から緩やかに外上方に伸びる口縁部を持ち、端部は丸くおさまる。54は大きく外反する頸部から外上方に伸びる口縁部で、端部は外方向につまみ出される。外面には二条一帯の雑な波状文を施し、頸部から下半にかけて、ハケ目が見られる。

55・56はくの字に外反する口縁部を持つ。55は外反する頸部と、やや内弯する口縁部は端部内



第14図　T－5出土遺物実測図

面で肥厚する。56はくの字に外反する広口壺で、くびれ部は明瞭である。頸部外面にハケ目が少々見られ、内面は指頭圧で調整する。

57から59は小型壺である。57は緩やかに外反する口縁部で、端部は丸くおさまる。口縁部には指頭圧痕が残り、体部外面にはハケ目が薄く残り、内面はヘラ削りが見られる。色調は淡褐色で胎土には角閃石を含む。58は長頸壺の体部で、胴部の張りは下半部3分の1くらいにあり、楕円型の断面をもち、底部は上げ底になる。頸部下端にクシ描文が残る。59はしもぶくれ気味の体部を持つ長頸壺である。底部は上げ底である。全体に摩滅して、外面調整は不明であるが、内面は指ナデで調整している。色調は黄灰色で、底部近くに黒ハンが見られる。胎土は荒い粘土を用いている。

60・61は高坏の脚部である。60は直線的に伸びる脚部から裾部が広がり、穿孔は見られない。61はハの字に開く脚部で3点透かしを持つ。

62から64は器台である。62はハの字に開く脚部で、穿孔は不明である。63はハの字に開く脚部から、斜め上方に伸びる坏部を持つ。穿孔の有無は不明である。64は脚部が裾部にむかって緩やかに開き、坏部は斜め上方に伸びる。穿孔は3点見られる。他にくらべやや古い時期と思われる。65は坏部である。垂下する口縁外面にはやや雑な波状文と、棒状の浮文を付す。坏部内面は平滑に仕上げる。

66・67は底部で、いずれも上げ底である。66は外面に、67は内面にハケ目を施す。

これらの遺物の時期は、64が弥生時代後期、その他は古墳時代初頭のものと思われる。

第6章　ま　と　め

東出遺跡での今回の調査は、ごく限定された範囲での調査であったため、各遺構の関連性や、個別の性格など、遺跡全体の解明は少々困難であった。しかし、東出遺跡の一部分なりとも明らかになったことは、今後この地域の歴史を認識していくうえで意義深い事である。

東出遺跡は大きく3時期の年代観が得られた。

Ⅰ期は古墳時代初頭である。T－4のSD－1、T－5のSD－1などがその時期となる。東出遺跡全体の中では倉橋部集落寄りの南部地域がその中心と思われる。T－5のSD－1は蛇行する自然流路の性格が強い。T－4のSD－1は出土遺物の遺存状態や、溝の法面から底にかけて玉石が張り付けてあるような状態が見られ、これは人為的に配石したものと思われるが、今回の調査では方形周溝墓などの遺構の可能性は少ない。農耕用の灌漑溝と思われる。

Ⅱ期としては奈良時代中ごろの時期が考えられる。明確な遺構は検出されなかったが、出土した遺物から推測される。T－2出土の陶硯はこの時期のものであるが、普通陶硯の出土は一般集落よりは官衙址や寺院址などからの出土が多い。硯の出土した遺跡は県内で30数カ所あるが、[10]東出遺跡に近接する御館前遺跡においても昭和56年度の調査で円面硯が出土している。

馬淵・千僧供町周辺では昭和56年度の御館前地区で墨書土器や円面硯の出土、[10]榎木立地区で南

北方向の掘立柱建物、溝の検出、昭和60年度の勧学院地区での「習書木簡」や墨書土器の出土[11]、昭和62年度の御館前地区での大型の掘立柱建物群の出土[8]など官衙的要素の強い遺構や遺物が多く出土している。東出遺跡の陶硯の出土もこうした遺跡群との関連を類推させるものと思われる。

Ⅲ期としては室町時代中頃の村落が考えられる。T－1より掘立柱建物が検出された。その全体像は明らかではないが、周辺の遺跡では柿木原遺跡[12]や半田遺跡[13]などで室町時代前半の掘立柱建物が検出されている。東出遺跡のT－1、SB－1はこれらの遺跡の建物群とほぼ同方向のN－24°－Wを示し、出土遺物も類以することから、この時期のものと思われる。

室町時代中頃は中世村落においても生産力の向上に伴って、村落内の共同体的結合が強化され、徳政一揆などの農民一揆が頻発し、その母体となったのは村落の座的結合であり、惣村であった。現在、馬淵町にある馬見岡神社、千僧供町の椿神社には中世的な伝統を残す宮座の祭祀が残されている。律令的村落が解体し、11～12世紀に中世的村落が形成され、さらに近世村落に近い集落構成が14～15世紀代に形成されるのもと思われる。Ⅲ期の東出遺跡はこうした時期の村落形成として、惣的結合をもった村落構造が形成されていたものと推察される。

註

① 八日市市史「八日市市周辺の地形と地質」『八日市市史第一巻　古代』（1983年）八日市市

② 同　　「古代のあけぼの」同上

③ 滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会「近江八幡市蔵ノ町遺跡・久郷屋敷」『ほ場整備関連遺跡発掘調査報告書XⅣ－4』（1987）

④ 滋賀県教育委員会「常衛遺跡」『滋賀県文化財調査年報』（1987）

⑤ 滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会『県道下豊浦鏡岡線道路改良工事に伴う金剛寺遺跡発掘調査報告書』Ⅱ（1987）

⑥ 近江八幡市教育委員会『勧学院遺跡発掘調査報告書』（近江八幡市埋蔵文化財調査報告書）Ⅷ（1985）

⑦ 田路正幸「五角形住居跡を検出　掘ノ内遺跡」『滋賀県文化財だより』No.86（財）滋賀県文化財保護協会1984

⑧ 近江八幡市教育委員会「御館前遺跡（Ⅱ）現地説明会資料」（1987）他

⑨ 奈良国立文化財研究所『平城京発掘調査報告XI』（1982）

⑩ 滋賀県立近江風土記の丘資料館『近江の官衙』－墨書土器と硯－（1983）

⑪ 滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会「近江八幡市勧学院遺跡・田中堂遺跡」『ほ場整備関連遺跡発掘調査報告書XⅢ－2』（1986）

⑫ 滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会「近江八幡市柿木原遺跡」『ほ場整備関連遺跡発掘調査報告書XⅢ－2』（1986）

⑬ 滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会「近江八幡市半田遺跡」『ほ場整備関連遺跡発掘調査報告書XⅤ－4』（1988）

図　　版

（1）調査地遠景（東より）

（2）調査前近景（北より）

（1）妙感寺古墳（西より）

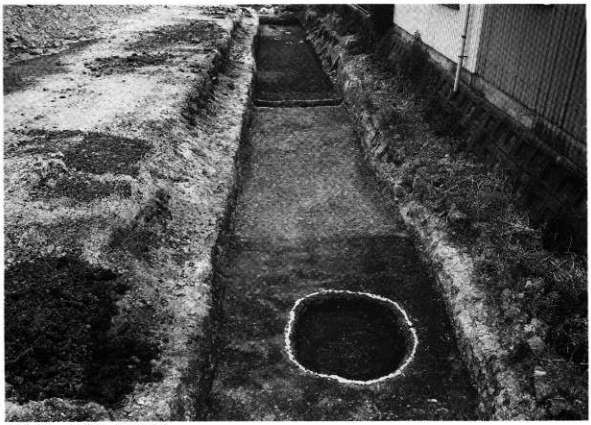
（2）T－2表土除去（北より）

（1）Ｔ－１検出状況（西より）

（2）Ｔ－１近景（西より）

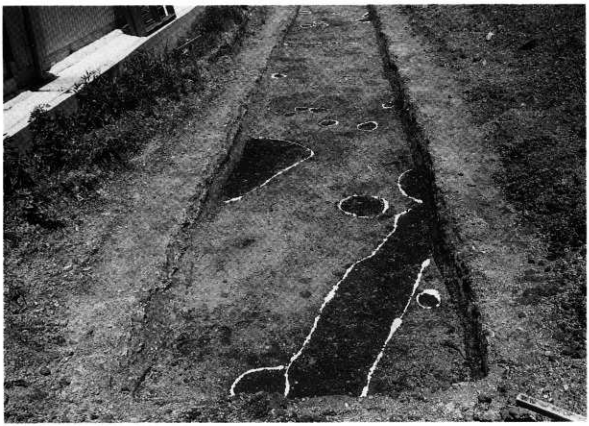
（1）T－1全景（西より）

（2）T－1全景（東より）



（1）Ｔ－２全景（北より）

（2）Ｔ－２全景（南より）

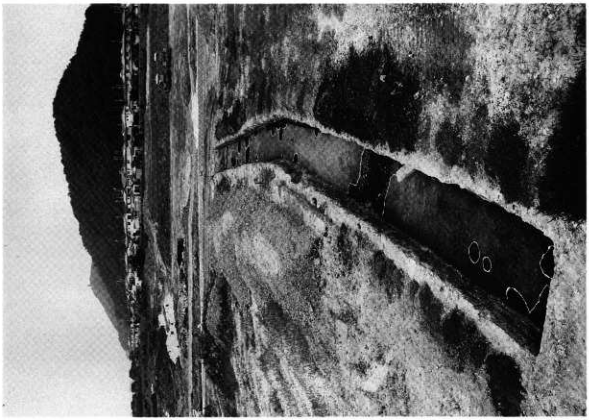


（1）Ｔ－３検出状況（北より）

（2）Ｔ－３土壙（西より）

（1）Ｔ－３全景（北より）

（2）Ｔ－３全景（南より）



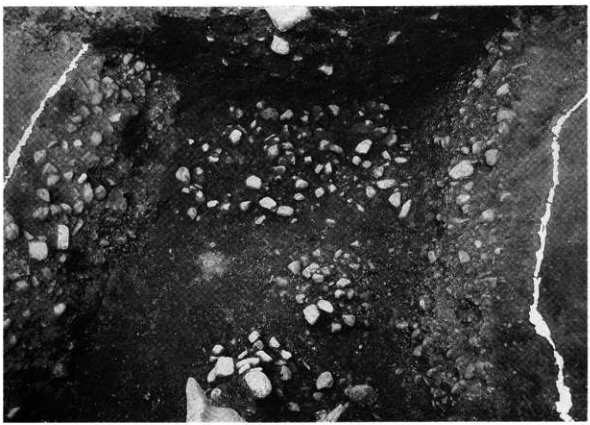
（1）T－4全景（北より）

（2）T－4全景（南より）

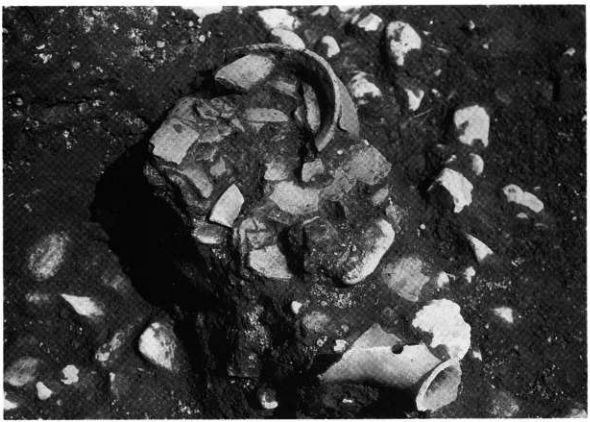
（1）Ｔ－４、ＳＤ－１調査状況（北より）

（2）Ｔ－４、ＳＤ－１近景（東より）

（1）Ｔ－４、ＳＤ－１検出状況（南より）



（2）Ｔ－４、ＳＤ－１完掘状況（東より）



（1）Ｔ－４、ＳＤ－１土器出土状況（南より）

（2）Ｔ－４、ＳＤ－１土器出土状況（西より）

（1）Ｔ－４実測状況（北より）

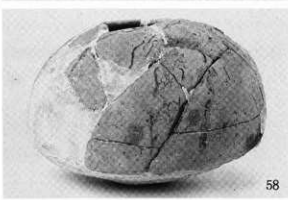
（2）Ｔ－４、ＳＤ－１断面（西より）

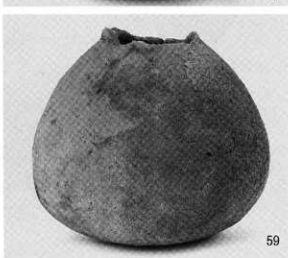
（1）T－5全景（北より）

（2）T－5全景（南より）

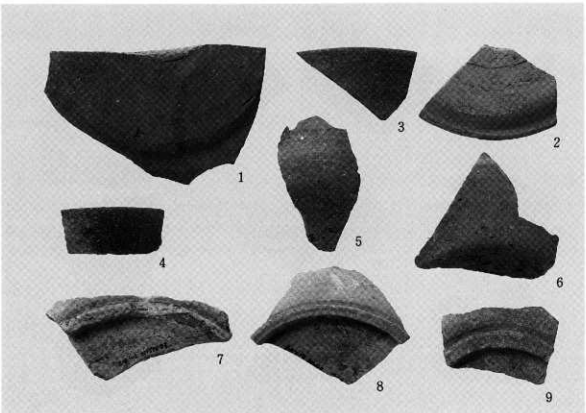
（1）Ｔ－５、ＳＤ－１近景（南より）

（2）Ｔ－５、ＳＤ－１土器出土状況（東より）

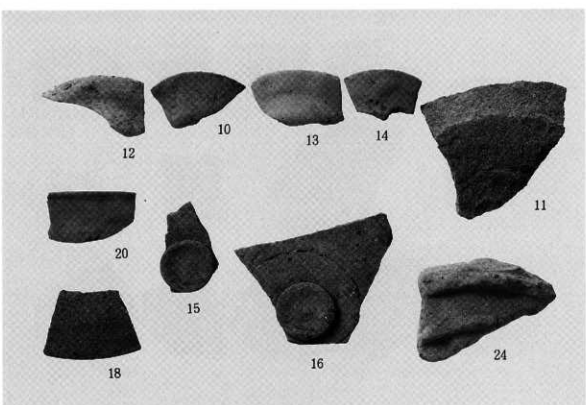




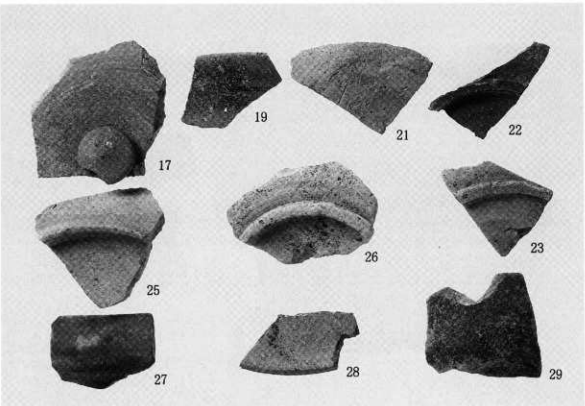
T－4（31.32.36.37.39.43）T－5（54.56.58.59）出土遺物



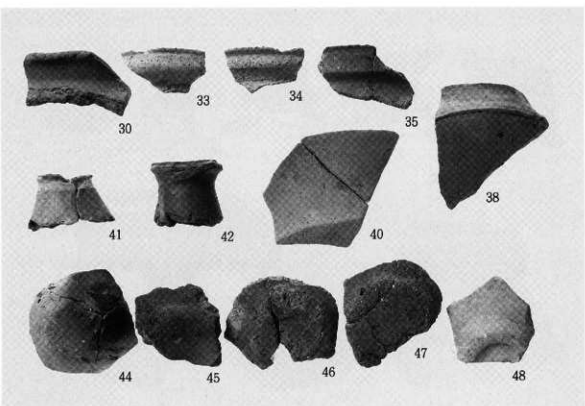
（1）T－1出土遺物



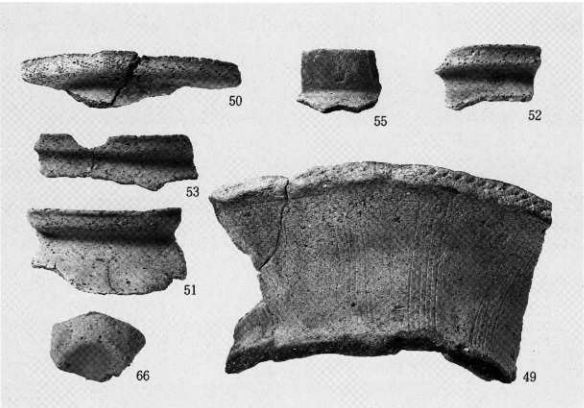
（2）T－1（10～14）、T－2（15.16.18.20.24）出土遺物



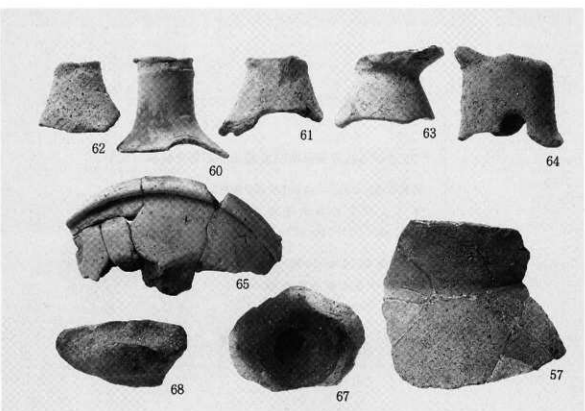
（1）T－2、T－3（28.29）出土遺物



（2）T－4出土遺物



（1）T－5出土遺物



（2）T－5出土遺物

1989年3月

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XVI－3

編集・発行　滋賀県教育委員会文化部文化財保護課
大津市京町四丁目1－1
電話 0775－24－1121 内線 2536

(財)滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732－2
電話 0775－48－9781

印刷・製本　柴原印刷株式会社